新・面瀬の昔ばなし　その参

「鯨塚　一話」

「鯨塚　一話」
「尾崎郷和会創立六十周年記念誌・六十年のあゆみ・東日本大震災」から

尾崎地区

鯨と人にまつわる伝承は、日本に広くある。鯨のことを勇魚（いさな）とも呼んでいる。和歌山県の太地では、古代から鯨漁が伝わっている。平成の大震災の前後に、テレビで、東京湾や和歌山県の湾に鯨が迷い込んで難儀したというニュースが画面を結構にぎわした。

気仙沼湾で鯨とは？　ありえないとも言えない。気仙沼漁業協同組合史によると、昭和五年水揚げの漁獲高の中には「くじら　二百八十六円」とある。この額は「さめ七十二万三千百八十一円」とは比べものにならないが、確かに捕れていた。だが、その後に鯨の表記はない。世界三大漁場たる三陸沖には、暖流と寒流によって運ばれたあらゆる種類の漁業資源が大量に集まる。海洋での食物連鎖の頂点にある鯨が、ここを往来するのは当然である。唐桑御崎では数柱の鯨塚が見られる。二頭の白鯨が遭難した船を救ったことに感謝して建立したとも、三陸沖で鯨が多く捕れたため鯨の霊を祀って建立したとも考えられている。歴史をひもとくと、何十年かに一回程度は気仙沼湾、つまり鼎が浦に鯨が迷い込んでいたようだ。鯨は、湾の入り口の浅瀬に、身の危険を感じるものらしい。だが、時すでに遅く、身動きがとれなくなり、漁民の餌食となり果てる。

平成二十四年七月二十五日の午後から、面瀬地区自治会連合会長の佐藤正儀さんにご案内いただきながら面瀬の自然と旧跡を一緒に歩く機会を得た。面瀬地区の海岸にある東端の尾崎地区から西端の長の森の水源地までのコースだ。このスタートが尾崎神社、東日本大震災においてたった一つ尾崎地区内に残された尾崎神社の鯨塚であった。碑文には明治八年とある。明治三陸大津波の二十一年前であり、昨今の自然界のことを思うと何かの符合を感じる。

「松岩百話集」や「尾崎郷和会記念誌」によると、尾崎沖に鯨が出没し、漁民は歓声をあげて小舟を出し、銛や太綱を手にもって

鯨をとらえ、浜辺の民が食し、残りは売り払って金銭にしたとある。この尾崎の鯨塚は、鯨をただの漁の対象としてだけではなく、何か尊い海のつかいとでも思っての建立であろう。神官不在の社であり、震災後でもあり、今後の研究調査が必要ではある。ここには私的一考に基づき、創作として一話に記した。

尾崎の村は面瀬川と鼎浦の海辺と東浜街道に区切られた区画にある。地理的な関係だろうか、地区民は、平成の震災大津波の前までも、一つ心の団結心があるところだった。心が一つということは実にすぐれた行為をなすものである。これは人間文化の跡をたどればいくらでも見い出せる。逆を言うなら、団結心のないところは何も決まらず何も為しえないといえるかもしれない。加えて、団結心の強い地には必ず賢明なリーダーがいるものである。尾崎浜で漁民によって鯨が引き揚げられた時、鯨は実に丁重に扱われている。海の幸の最高峰はその巨体の処置によってより高い名誉を得たのである

江戸時代後期から明治時代にかけて、漁村は、貧しさを絵に描いたような暮らしぶりであった。村人たちは貧しさが当たり前と考えていた。しかし、村の長たる尾形巳代之助は違っていた。いつかこの村から大人物が育ち、村を富ませるように導いてくれることを思い念じていたのだ。そんな矢先であった。

漁師の一人が尾崎と大島の間に黒山のような盛り上がりを発見した。その日は曇り空だったため、はじめは大波かと思った。ところが、その大波、波にしてはやけにゆっくりと動いているではないか。けげんな顔で前方を凝視していた漁師は息をのんだ。大波の中に見えたのだ。白に黒い筋目の入った縞模様が。

「く、く、鯨だぁあ。」

声も出ないくらいに驚いた。その漁師がそれまでに見たこともない大きさであった。目分量で見て、十間以上もある。どうりで大波にしか見えないわけだ。漁師は小舟を浜に寄せ、大声で村人を集めた。

「みんなぁ、鯨だ、大くじらだ。ありったけ銛(もり)を持って来てくれ。」

「できるだけ沢山の手が欲しい。船を出せ、みんな、船を出そう。」

「弱った鯨に巻き付ける太綱も必要だな、集めろ、集めろ。」

あっという間に二十艘の小舟が集まり、巳代之助を先頭にそろって浜を出た。大鯨をとらえるため、漁師たちが力を合わせた。それぞれが持ち場を守り、全力を出し続けた。

どのくらい時間がたったろうか。やっとのことで鯨を浜に揚げると、漁師たちは大鯨を前にしてへたり込んでしまった。鯨の知らせを聞きつけて、女、子ども、年寄りが集まってきた。貧しい漁村に、大きな大きな賜物がおどりこんできたのである。

「こんな大きな魚はめったにとれねぇもんだ。悪くならないうちに、獣や鳥に取られねぇうちに、煮たり焼いたりしちまうべし。早く腹一杯、食べべし。」

貧しく飢えた者たちは腹のことしかなかった。鯨にむらがる幼い子ら。われさきに桶に鯨肉を入れようとする女たち。鯨の巨

体に隠れながら錆びた出刃包丁で分厚い鯨の皮をはぎとり肉をくすねようとしている老婆。ある男は、自分こそ小舟を出した者だからと言い、鯨の肉は船を出した者だけで等分しようと言い出す。われ勝手で、村の衆のことを考えない者たちが大騒ぎしている。

親なしの子がいた。うれしそうに肉を抱え家に向かう親子の後ろ姿を見て、ただ指をくわえている。親なしの子よ、あわれ。巳代之助は、だまって村人の姿を見ていた。勝手たる者たちへのいかりがこみ上げてくる。胸を情けなさがおおう。でも、思う。貧しくなければこんなこともない。こんなに貧しくなければ…。幼い頃のことが思い出された。貧しい頃の自分と目の前の村人が二重写しになった。胸にこみあげてくる大きな大きな、強い思い。かねてからの思いが、巳代之助を動かした。巳代之助は立ち上がり、大声で語り始めた。

「尾崎の村の衆よ。この鯨はだれのものか。だれがくださったものか。われら先祖以来、海よりの幸をいただき、なりわいしてきた者である。そして古来より、何より仲むつまじく、一匹の魚でもみなで分けおうたものではないか。われら尾崎の村の衆、思い返してほしい。ここ数年は飢饉や不漁続きであった。ひもじいからと、われ勝手のし放題ではなかったか。海の神様も御先祖様もさぞやおいかりであろう。今、われらは、この鯨様に試されておるように思えてならぬ。尾崎の者は、はたして、みな身勝手の民か、みな互いに人思いの民か。試されておるのじゃ。貧しくとも飢えてお

っても、われらは誇り高き尾崎の村人ではないか。この大きな賜りものの鯨を、どうすることがよいか、よくよく考えようではないか。」

と。鯨にむらがっていた男も女も幼子も年寄りも、その声に、はっと手を止めた。そうだ。我らは誇りある海の民、尾崎の村人ぞ。みんな、われにかえった。

「村長どの。いかなる考えありや。言うてくれ。」

はじめに鯨を見つけた男が言った。みながうなずいた。

巳代之助は村を貧しさから救う考えを述べた。皆は巳代之助の言葉に強くうなずいた。そして鯨は村人に大きな幸をもたらした。一頭の鯨の半分を、村人に一人残らず同じく分け与え、内蔵や皮脂は干物や塩漬けにした。残り半分の肉と脂を気仙沼の魚商人に売った。なんと当時の額で六十円にもなった。平成の今で言うとすごい金額だ。しかも、鯨の臓の腑から竜涎香(りゅうぜんこう)が見つけられた。鯨何万頭に一つという貴重な珠である。ご祝儀として、これまた同じ高値がついた。鯨の肉と脂と竜涎香(りゅうぜんこう)で得た金銭は、巳代之助の言うように、鯨様が尾崎の衆の心持ちを感じ取ってくださったものとして、村の子らの勉学のためや学校へ通えない子らへの奨学金にあてられた。また、同時に、金銭の一部をつかい鯨塚が建立された。

他の地には、鯨の身と命が飢饉の飢えから人々を救ってくれたことに感謝して塚を建立した伝承がある。尾崎の浜も、村人の鯨に対する感謝にもにた心からの塚建立であると思われる。明治八年建立の尾崎の鯨塚をつぶさに見ると「鯨之璽」とある。「鯨の霊」ではない。「璽」とは印章のことでしかも中国古来天子がつかうしるし、印章である。この文字をつかうということは、きっと鯨に対して最上の敬意を表しているのだろう。「鯨様から賜ったお心のしるしとして、誇り高い尾崎の村人魂をいつまでも忘れぬように」ということであろうか。感謝ともいうべきものか。

平成の大震災の大津波にもめげず、今も鯨塚は尾崎の浜を見つめている。尾崎に行って見て下さい。尾崎の人々の心を感じて下さい。